



A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。
※倍率100%の場合

目次

銀河鉄道の夜	5
オツベルと象	99
注文の多い料理店	115
双子の星	133
インドラの網 ^{あみ}	165
黄いろのトマト	177

銀河鉄道の夜

一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちでするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「ではよし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に

見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙なみだがいつぱいになりました。そうだ僕は知ぼくっていたのだ、勿論カムパネルラも知もちろんつている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋しょさいから巨おおきな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁ページいっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈はずもなかつたのに、すぐに返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの天あまの川がわがほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂じゃりや砂利つぶの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨おおきな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油しゆの球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮うかんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲すんでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちようど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えましたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入つた大きな両面とつの凸レンズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレ

レンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒すなわ即ち星しか見えないでしょう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまい下さい。」

そして教室中はしばらく机つくえの蓋ふたをあげたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまんな中にして校庭すみの隅さぐらの桜さくらの木きのところに集まっていました。それはこんやの星祭ほしまつりに青いあかりをこしらえて川へ流すからすうり烏瓜からすうりを取りに行く相談さうだんらしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ふってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝えだにあかりをつけたりいろいろ仕度したくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処くわつぱんじょにはいつてすぐ入口の計算台けいさんだいに居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴くつをぬいで上りますと、突つき当りの大きな扉とをあけました。中にはまだ昼なのに電燈でんとうがついてたくさんたくさんの輪転器りんてんきがばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居おりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルに座すわった人の所へ行つておじぎをしました。その人はしばらく柵たなをさがしてから、

「これだけ拾ひろって行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジョバンニ